遺児によるフィリピン慰霊友好親善訪問に参加して

都筑区支部　串田　明久（子）
戦没者　串田　一生
戦没地　フィリピン

戦況が日一日と悪化してゆく昭和十九年六月農業一筋三十八歳の父にも召集令状が来た。私が小学校五年生であった。二度と帰ってこられないと覚悟していたのか、遺言と辞世の句と五人の子供達にもそれぞれ一句ずつ残し出征した。

吹かば吹け　しこの嵐はすさぶとも　我はゆくなり大君のため

遺言通り墓地の一角に建てられている。

出征して間もなく、外地へ出発との連絡が入り母と面会に行ったが途中品川駅に向かって行軍の一群に出会う。何百人の中から、ようやく見つけることが出来たが声もかけられず父とはそれが最後であった。今でもその光景がはっきりと思い出される。

門司港よりフィリピン諸島のセブ島へ上陸した。激しい攻防戦の中、終戦一ヶ月前七月十二日

©2011_財団法人神奈川県遺族会

戦死、終戦が一ヶ月早ければと今でも悔やんでいる。

母も一度は父の最後の地へお参りに行きたいと言っていたが当時は治安も悪く果たせなかった。母亡きあと私も年々父への思いが強くなり、今実行しなければ一生悔いが残ると思い体調に少し不安があったが平成二十年戦没者遺児によるフィリピン慰霊友好親善訪問に申し込み、全国より百六十名の参加者と十一月二十六日故郷の水、お茶、父の好物等と母の遺影とともに九段会館へ集合、六班に分かれた。私はF班二十八名これから一週間行動をする仲間全員で靖国神社へ参拝、お神酒を頂き、成田空港近くのホテルに一泊、翌朝六十余年ぶり父の待っているマニラへ向かって出発した。乗り継ぎで最期の地であるセブ島につく。セブは二名である。

朝早くバスにて出発、安全のため軍隊より二名の兵士が銃を持って護衛に当たってくれ、現地の案内人も日本軍のことを良く説明してくれた。戦没地ルカ高地へ着く。ヤシの木のジャングルの中で、日本から用意していった組み立て式の祭壇を全員で準備する。三十度以上の暑い中、蚊、蜂、時には毒ヘビも出る。ヤシの実の落下に注意しながら父の好物、母の遺影を供え、今までの思い、戦後大きく変わった故郷、家族の報告と追悼の言葉を挙げる。

遠くはなれたこの地で父は祖国日本の為に立派に散っていった。どんな思いであったか親孝行も出来なかった事を詫び、感無量であった。今までの心の重荷がおりた。明日からレイテ島・オルモック、タクロバン等を廻り、山の中、海岸と暑い中お互い助け合ってお参りをしたが同じ境遇なのですぐに親しくなれた。毎日が山の中、現地人の暮らしは質素だ。バナナやヤシの葉で作った小屋であるが、おおらかな気持ちの人達で、今日がよければ先のことは考えないらしい。

©2011_財団法人神奈川県遺族会

お参りの場所には必ず子供達が山の中からお供え物を目当てに寄って来る。終わりの日、親善の一つ小学校を訪問、ヤシの林の中の小さな校舎、電灯もない。日本から用意して行った学用品、衣類等を贈った。明るく元気で可愛い子供達は全員で見送ってくれた。

最後はマニラにて全戦没者追悼式を、カリラヤでは各県ごとに参拝した。夜は大使館や各県からも出席懇親会が盛大に催された。

今回は普通では行けない現地で参拝が出来、一生の思い出となりました。再会を約束して帰路に着きました。

©2011_財団法人神奈川県遺族会